

## 熊本バンド

## 設立直後の同志社

- 設立されたばかりの同志社英学校は、設備、生徒、制度、教員、カリキュラム、授業など、いずれをとっても未整備の状態であった。
- 「熊本バンド」入学により、内実を整えることになる。

## 日本プロテスタント 三大源流

札幌バンド

横浜バンド

熊本バンド

## 札幌バンド

- 札幌農学校（今の北海道大学）を舞台として、同校教頭W・S・クラークが卓越したメンバーを生み出す。
- 内村鑑三
  - 「無教会」派の指導者。
  - 門下から矢内原忠雄と南原繁（いずれも東大総長）が出る。
- 新渡戸稲造
  - アメリカ留学中にクエイカー（Quakers）に改宗。
  - 国際連盟事務局次長のときには、同志社の理事も務める。



## 横浜バンド

- アメリカ・オランダ改革派から派遣された宣教師、J・H・バラが1872年に創立した横浜公会（今の横浜海岸教会）に集った青年たちが「横浜バンド」と呼ばれるようになる。
- 植村正久
  - 長老派系教会の指導者

## 熊本バンド

- 「熊本洋学校」の出身者たち
  - 卒業後、組合教会（会衆派教会）の指導者になる。
- L・L・ジェーンズの感化を受け、キリスト教に傾倒する
- 1876年、花岡山の山頂で「奉教趣意書」に署名をする。
- キリスト教信徒を生み出したということで、同年、熊本洋学校は廃校に。





熊本市郊外花岡山山頂に立つ熊本バンド奉教記念碑

## 熊本洋学校の歴史的背景

- 明治維新で薩長土肥に遅れをとった肥後が、教育面で先駆的であろうとして立ち上げた学校。
- 発案者は、横井小楠(しょうなん)の門弟たち(いわゆる「実学党」)。特に、彼の甥の大平(だいへい)。
- 大平の師、フルベッキの斡旋によりジェーンズが教師として招かれる。
- 実学党は、熊本医学校も設立する。北里柴三郎、大久保真次郎らを輩出。
- 横井小楠の死後、6年経って同志社英学校が設立される。彼の子ども(時雄と宮子)が入学。

## 熊本バンドの入学

- 熊本洋学校廃校後、ジェーンズは大阪に英語教員として赴任。
- 生徒・卒業生らは、ジェーンズの勧めで同志社に入学。
- 長崎の宣教師スタウトから同志社のことを聞いたジェーンズが、デヴィスに生徒の引き取りを依頼。
- 熊本からやって来た30数人の生徒たちを宣教師たちが「熊本バンド」と呼ぶようになる。
- 宮川経輝(つねてる)、海老名弾正(後に第八代同志社総長)、下村孝太郎(第六代同志社総長)、小崎弘道(同志社第二代社長)
- 彼らのために同志社は急きょ「余科」(神学科)を新設。
- 学生たちは、余科を「バイブル・クラス」と呼ぶ。同志社神学校の起源。



新島校長(右端)と熊本バンドを含む初期の同志社英学校生(1877年秋)

## 熊本バンドの功績

- 入学当初、熊本バンドの多くは同志社に失望する。
  - 彼らのジェーンズに転校の相談をする。
  - 「不満があるなら自分たちでまず改革せよ」。
- 熊本バンドの働きにより、同志社の校風は一変する。
- 熊本バンドは、京都における教会形成の主力を担うことにもなった。
- 同志社が雇用した最初の日本人教員も、熊本バンドから輩出された。
- 日本社会に対し、宗教、研究、教育、社会福祉、社会事業、マスコミといった領域で有為な人材を送り出す。

## 仮開校と本開校

- ラーネッドが熊本バンドを同志社設立者の一員に加えるほど、彼らの働きは大きかった。
- 「ヨルダン川には三つの源流があるという事ですが、同志社にも三つの源流があるというてよるしい。すなわち、第一の源はもちろん新島先生ですが、第二の源はアメリカン・ボード、そして第三の源は熊本バンドであります」。
- 1875年11月29日、同志社英学校の設立。「仮開校」のような状態。
- 1876年9月18日、新校地での竣工式。熊本バンドの入学。「本開校」とも言える出来事であった。